



# ささへるニュース

**Vol.8**  
2015年 夏

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial  
Health Foundation  
笹川記念保健協力財団



**特集**

## グローバル・アピール2015

「世界ハンセン病の日」サイドイベント活動レポート

**第11回アジア太平洋ホスピス会議参加報告**

**ハンセン病対策活動への回復者参加を強化する臨時専門家グループ会議開催**

ホスピス緩和ケア事業 助成金交付式 / 2015年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

国立ハンセン病療養所医療従事者フィリピン研修 / 2015年度WHO 笹川健康賞

ネパール大地震緊急支援 (ポートルースチャリティ基金から) / 2015年度を迎えて

# グローバル・アピール 2015

## 「世界ハンセン病の日」サイドイベント活動レポート

当財団では1月に開催した「グローバル・アピール」(主催:日本財団)に合わせてサイドイベントの企画をしました。テーマは「ハンセン病問題を考えよう」、広く一般に向けての啓発が主な目的です。企画に際しご協力いただいた皆様には、厚くお礼を申し上げます。全国から集まったサイドイベントの様態を、ピックアップしてお伝えいたします。

### サイドイベント実施を振り返って

一般公募で集まったサイドイベント23件は、北は宮城から南は沖縄まで全国各地で開催され、参加者総数は2,500名超に及びました。特筆すべきは、今までほとんどハンセン病と関わることのなかった学生や市民を対象とした企画が多かったことです。今回の一般公募によって、これまでほとんど当財団と接触がなかった人々や地域にアプローチできたことも大きな喜びの一つでした。中には大きく新聞等で取り上げ



日本財団笹川陽平会長と並んで学生たちもハンセン病問題を考えました  
(ハンセン病でつながる若者シンポジウム 於:早稲田大学)

られたものもあり、その波及効果は参加人数の何倍にもなると推測しています。

活動内容は様々で、写真展や講演会・シンポジウム、ハンセン病療養所の見学や、冊子・映像の制作も

ありました。今回のサイドイベント23件によって、多くの人々にハンセン病を知っていただく機会を提供できたと同時に、当財団も新しいネットワークを築くことができました。ありがとうございました。

### 宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター(MG-LAC)

講演会(2月6日)  
写真展(2月5日~27日)  
ハンセン病療養所見学(2月10日)

宮城学院女子大学は、宮城県仙台市にある約130年の歴史を持つ大学です。今回のイベントは学生が主体となり、学生に自主活動の機会



入所者自治会長の久保瑛二さんから話を伺いました(於:国立療養所東北新生園)

を提供する窓口であるリエゾン・アクション・センターがサポートする形で行いました。イベントは、当財団理事長喜多悦子を講師とした講演会、日本財団所属のフォトグラファー富永夏子氏の写真を展示した写真展、そして宮城県登米市にある国立療養所東北新生園見学の3部構成で行われました。

講演会では「物事を多角的にとらえる」という切り口で、ハンセン病をめぐる諸問題から世界情勢など、喜多のこれまでの経験談を交えた講演を、学生たちは興味を持って聞いていました。アンケートには「世界

に関心を持つということが、人への関心を持つことにつながる繋がった。病気、戦争など世界で起こっていることに関心を持ち続けたい。」というような、学生らしい将来に期待させるようなコメントが多く寄せられました。

学生企画責任者である作間温子さんからは、「一連のイベントを通して、ハンセン病に罹患したためにそこに押し込められた人々の気持ちに触れ、人間の尊厳とは何かを考えると同時に、入所者たちの『生きる力』に触れることができました。』とメッセージが寄せられました。

## 片野田 斉 写真展

### 「きみ江さん～ハンセン病を 生きて～」(2月7日～16日)

銀座にあるギャラリークオリア・ジャンクションで行われた写真展は、東京都東村山市在住の報道写真家片野田 斉さんが、5年間にわたってハンセン病元患者の山内きみ江さん



山内さんも会場で来場者とのふれあいを楽しまれていました  
(於：ギャラリークオリア・ジャンクション)

を追い続けた記録の一つの集大成として企画されました。片野田さんが山内さんに関わったこの5年間は、山内さんが療養所から「外の世界」に飛び出し「普通の生活」に挑戦してきた5年間でもあります。療養所で長く生活してきた山内さんにとって、「外の世界」で「普通の

生活」を送るということはどういうことなのか、改めて考えさせられる写真展でした。

銀座という場所柄様々な方が足を運んでくださり、ハンセン病については「知らなかった」という感想が多かったようで

すが、中には「昔近所にいたんだ」とぼつりとおっしゃる方もいたそうです。片野田さんは「きみ江さんのハンセン病元患者というだけではない、一人の人間として前向きに生きるパワーの強さに触れることで何かを感じて帰っていく方が多かったように思います。」と、写真展を振り返っていました。

### 山内さんからのメッセージ

大きなイベントに関わることができて、外国の方からも激励をいただき、たくさん記念撮影もできて、とても嬉しく思います。これをエネルギーに、これからもっと活躍したいです！

## 音楽座ミュージカル

### 朗読ミュージカル「泣かないで」 (2月15日)

サイドイベント23件の中で最もユニークな企画の一つとなった、音楽座ミュージカルによる朗読ミュージカル「泣かないで」の上演についてご紹介します。音楽座ミュージカルは東京都町田市に活動拠点を置くミュージカルカンパニーで、もともと音楽座ミュージカルが持つレパートリーに、遠藤周作著「わたしが・棄てた・女」を原作にした「泣かないで」という作品があります。この作品は、戦後間もない東京で女子工員として働いていた主人公ミツの

ラブストーリー、しかしミツはハンセン病と診断されてしまいます。

音楽座ミュージカルでは今回のサイドイベントに合わせて「泣かないで」を大胆に朗読劇に編集し、さらにミュージカル上演と併せてハンセン病に関する解説と参加者によるグループディスカッションも行いました。ミュージカルというエンターテインメントだけでは伝えきれない、ハンセン病を知ってもらうという啓発の機会であるということ、しっかり補う企画となっていました。

参加者は地元町田市の子ど

もたちや市民がほとんどで、演技・歌・ストーリーの素晴らしさに感動している様子が多く見られました。グループディスカッションの最後には劇中歌を全員で合唱し、会場全体が一体感に包まれたイベントとなりました。



キャストの迫真の朗読に引き込まれました  
(於：音楽座ミュージカル芹ヶ谷スタジオ)

## サイドイベント主催者一覧

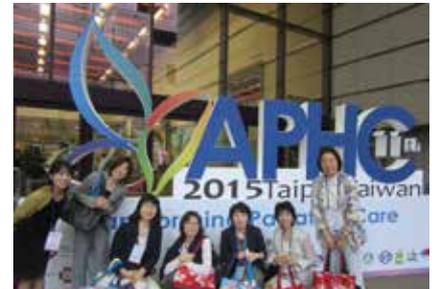
ハンセン病でつながる若者シンポジウム実行委員会 / AMSA Japan / IDEA ジャパン / 黒崎 彰 / 名大 日本文化研究会 / 福岡国際ミズの会 / 宮城学院女子大学リエゾン・アクション・センター / 栗生楽泉園看護部 / ハンセン病支援学生 NGO-QIAO / 宗像市役所 / 金沢大学 / 音楽座ミュージカル / 東京多摩北地区郵便局長会 / 片野田 斉 / 佐藤 健太 / からくわ丸 / 日本赤十字社沖縄県支部 / 笹川記念保健協力財団 (計18個人団体)

## 参加 報告

# 第11回アジア太平洋ホスピス会議

台北で開催された第11回アジア太平洋ホスピス会議 (Asia Pacific Hospice Conference, 略称 APHC) で日本財団ホスピスナーズネットワーク会員5名とともに、「日本財団ホスピスナーズネットワーク会員」の実態調査についてポスター発表を行いました。

- 学会名 第11回アジア太平洋ホスピス会議 (APHC)
- 開催日 2015年4月30日～5月3日
- 場所 台北国際会議センター (台湾)
- テーマ Transforming Palliative Care (緩和ケアの変換)
- 参加者 アジア各国から約1,300名



APHC会場にて

## APHCの始まり

アジアにおけるホスピス緩和ケアのネットワーク化の必要性に気づかれた、日野原重明先生(ライフ・プランニング・センター理事長・笹川記念保健協力財団名誉会長)の呼びかけで、1995年「アジア太平洋ホスピスネットワーク (Asia Pacific Hospice Network, 略称 APHN)」が発足しました。APHNは、アジア各国のホスピス緩和ケアの臨床・教育・研究を分かち合い、協力関係を築くことで、アジア地域におけるその発展と向上を目的としています。数年にわたる会議の後、シンガポール国立がんセンター内にAPHN事務局が置かれ、2001年に法人化され今日に至っています。1989年シンガポールで行われた第1回APHCを皮切りに、以後各国持ち回りで行

われ、近年では2年に1度開催されています。

## 日野原レクチャー

2009年に日野原先生の支援により始まったAPHCの目玉プログラムで、ホスピス緩和ケアの進んだ欧米各国より専門家を招へいし、学習の機会を提供しています。今回の台北会議では、招へい者2名による講義が行われ、そのお一人である、Dr. Hutchinson(ハッチンソン教授)は、カナダのマギル大学の全医学生に対し行われている“Whole Person Care”(全人的ケア)プログラムについて話をされました。このプログラムは、保健医療の使命を「治療と延命」から「患者のQOL(生活の質・人生の質)」と同等まで拡大することを目指しています。これまで

のCuring(治療)を旨とする医療だけでは、完治が望めない患者に対して十分とはいえず、そこにはHealing(癒し・

## ポスター発表

治療)が必要となります。医療者は、CuringとHealingの両方を習得し、最善のケアを患者に提供することが必要であると述べられました。

日本財団、当財団が支援しホスピス緩和ケアの専門研修を終了した「日本財団ホスピスナーズネットワーク会員(約3,000名)」に対し行った実態調査の結果を、“A Survey among Nippon Foundation Hospice Nurses Network”と題し、ポスター発表を行いました。今回初めて海外の学会に参加したネットワーク会員は、慣れない英語に苦労しながらも、アジア各国の緩和ケアに関する諸問題を学び、また、第1回・2回日本財団ホスピスナーズ研修会の講師であるDr. Rosalie Shaw(ロザリー・ショー先生)の講義を聴く機会に恵まれ、大変刺激を受けた様子でした。このような貴重な学びの機会の提供を、今後も検討していきたいと考えています。

のCuring(治療)を旨とする医療だけでは、完治が望めない患者に対して十分とはいえず、そこにはHealing(癒し・



Dr. Rosalie Shaw (APHN 初代事務局長) と一緒に記念撮影  
左から、高屋敷麻理子(盛岡赤十字病院)、後藤たみ(神戸市立医療センター西市民病院)、橋爪睦(諏訪赤十字病院)、倉持雅代(浅草医師会立訪問看護ステーション)、富岡里江(訪問看護ステーションはーと)

# ホスピス緩和ケア事業 助成金交付式

2015年度ホスピス緩和ケア事業の「研究助成」、「ホスピス緩和ケアドクター研修」そして、「奨学金支援」の助成者を対象に助成金交付式を開催しました。

**日時** 2015年4月10日

**場所** 日本財団ビル

国内の緩和ケア向上を目指す研究助成は審査の結果、15名が選出されました。本年度は緩和ケアに関する教育プログラムの開発、既に開発・確立されたプログラムの評価、地

域住民への啓発活動など、様々な研究に対し支援を行います。

人材育成事業では、ホスピス緩和ケアの専門性を学ぶため、4名の医師が各施設で研修を行います。また、看護師の国内外の大学院進学への支援を通し国内の緩和ケアの



決定通知授与の様子

それぞれの進学先で学んでいます。交付式にて決定通知の授与後、各助成事業の事務手続き説明会と助成者同志の交流を目的とした懇親会を開催しました。助成者は、1年後の「助成者報告会」にて、それぞれの研究・研修成果を報告する予定です。



交付式参加者の写真

域推進を目指す奨学金支援は、がん看護専門看護師・在宅看護専門看護師取得を目指す方や小児緩和ケアの研究に取り組む方など4名が選出され、4月より

## 2015年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

地域に根差した在宅看護事業所を企画・運営できる経営力を持った看護師の育成を目指す「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業は、2年目を迎えました。1月に研修を終えた1期生の開業支援と、新たに研修が始まる2期生を迎え、本事業はさらなる発展を目指します。

### 第2期開講式

今期の研修生は、6月15日に開講式を迎えました。昨年同様、日本財団笹川陽平会長から「2期生は、10年、15年先を見据えることができる精鋭の9人といえる。人を使う

経営者の原点として目配り、気配り、心配りができる人になってください。」とお言葉をいただきました。受講者代表は、「看護師として培った経験を基に、自宅療養者のケアはもとより、他の保健専門家との連携において、健康障害を持つ人々

### 1期生の開業

昨年度の研修を修了した1期生から、2015年春、早くも2名が事業所運営を開始しました。



2015年度開講式

であっても、安心して住み慣れた地域での暮らしを保障できる専門家になれるよう、最大限の努力を致します。よろしくご指導ください。」と力強い言葉が返されました。



- 第1期修了生 高岸博子 医療看護110番リハビリ訪問看護ステーション  
<http://hp.kaipoke.biz/fh4/>
- 第1期修了生 山本志乃 日本財団在宅看護センター横浜  
<http://zaitakukango.net/>

# ハンセン病対策活動への回復者参加を強化する 臨時専門家グループ会議開催

病気を経験した人は、その病気の症状や、治療法、治癒後の注意点を知っています。ハンセン病から回復した人も、その経験から得られた知識と知恵を活かし、新たにハンセン病に罹った人や治癒した人のケアやサポートをすることで、ハンセン病対策に参加し始めています。

世界保健機関は、ハンセン病回復者の経験を今後のハンセン病対策活動に活かしてもらうため、2011年に、「ハンセン病対策活動に回復者の参加を強化するためのガイドライン」を発行しました。4年が経過し、世界中で回復者の参加が進んでいます。しかし、参加が実現するまでの経過、参加中の問題点や対応策、参加が対策活動や回復者にもたらすインパクトなどの情報が、草の根レベルの医療従事者や回復者の間で広くシェアされておらず、これから参加を進めたい、もっと強化したいと思っている人たちに役立つ情報手段が不足しています。

世界ハンセン病団体連合 (ILEP) のメンバーである当財団は、2014年4月から、ILEP技術委員会の承認の下、回復者の参加強化を考えるために7人のメンバーからなる臨時専門家グループ (TEG) を編成し、そ

のコーディネーターを務めています。7名のうち1名は、インドネシアの若い女性の回復者です。

2014年4月にインドネシアで開催した第1回会議に続く第2回会議を、4月27日と28日の2日間、中国広東省広州市で開催しました。会議直前の4月25日に発生した巨大地震で欠席を余儀なくされた、ネパールからの参加者 (回復者2名と専門家1名) を除く29名 (専門家、回復者、通訳、事務局担当者を含む) が、本会議に参加しました。

今回の会議の主目的は、草の根レベルでハンセン病対策活動をする医療従事者や回復者が手軽に使える、回復者参加の活動事例を収集したハンドブックを制作することです。実際に活動に参加している中国、インドネシア、インド、エチオピアからの回復者6名 (男女各3名) が、活動参加の動機、活動内容、直面



グループディスカッションの様子

している／した問題と解決法、役立ったサポート、生活の変化などをシェアしてくれました。その後2グループに分かれ、活動参加が、回復者自身と対策活動にどのようなインパクトを与えたかを、深く議論しました。

対策活動参加に伴う経験や思いには、国による違いが少なくありません。しかし、活動参加への動機としては、周囲に良き理解者や指導者が居たという点、家族を説得し理解を得るのは困難だったという点、また、参加を通じて自信と自尊の気持ちを得られた点は、ほぼ全員が挙げていました。

2日目の午後、6名の回復者は広州市内のハンセン病定着村を訪問し、中国の回復者との交流を持ちました。一方、TEGメンバーは、今回の回復者からの聞き取りと議論を通じて得られたことを元にした事例収集を含み、今後の作業計画を検討しました。本TEGの作業による成果物は、2016年9月に中国で開催予定の、第19回世界ハンセン病会議で発表と報告をする予定です。



会場、華金盾大酒店 (Wa King Town Hotel) のロビーで集合写真

# 国立ハンセン病療養所医療従事者フィリピン研修

2015年2月、全国13の国立療養所から医師5名と看護師12名の参加を得て、セブ島・クリオン島・マニラで、1週間の研修を行いました。日本の年間ハンセン病新規診断患者数ほぼ0に対し、フィリピンでは2,000弱。7日間の日程で、5カ所の病院／療養所、WHO西太平洋地域事務局を訪問し、診断・治療やケアの現場の視察や、現地医療従事者、患者・回復者の方々との交流を通し、臨床知見修得の機会を持ち、グローバルな視点から病を見つめました。参加した医師、看護師を代表して、お二人のメッセージをご紹介します。

**国立療養所菊池恵楓園 皮膚科医師 中村香代**  
各地の療養所から集まった医療従事者の一員としてこの研修に参加する機会に恵まれました。多くの訪問先の中で最も印象に残っているのはクリオン島です。そこでは多くのハンセン病患者・回復者の子孫の方々が暮らしていました。ある女性が島を案内してくれました。彼女もまたハンセン病の第2世代であり、笹川記念保健協力財団の援助を受け大学へ進学、理学療法士の勉強をして島へ戻ってきたとのことでした。彼女は聡明で、地域に根差した自分の役割をよく理解しており、それを果たすために一生懸命努力していました。施設や物資も必要ですが、人材を育てるということも大きな援助であることに大変感銘を受けました。今回の研修でハンセン病には医学的・社会的に困難で根深い問題がいくつもあることを実感しました。

次に彼女に会うときには、それぞれの国や世界の状況の改善を喜びあえればと思います。その日のために自分に今何ができるか自問の日々です。

**国立療養所多磨全生園 看護師 菅原早苗**  
日本のハンセン病の歴史と海外の現状を目の当たりにし、筆舌に尽くしがたい人生を歩むのは、時代や国が変わっても同じであることに衝撃を受けました。その中で笹川記念保健協力財団が40年間にわたり希望の支援を送り続けていることに感銘を受けています。フィリピンは経済的には発展途上かもしれませんが、人々が家族や仲間とのつながりを大切に、助け合って生きている様を見て、私自身、改めて生きるために必要な水など貴重な自然資源や、家族・友人への感謝の思いが溢れました。とともに、

この「あたりまえ」という感覚は知らないうちに誰かを差別してしまう凶器になる、差別やスティグマはもしかしたら身近にあるのかもしれない、と自己を見つめ直すきっかけにもなりました。今回の研修を終え、生命の尊厳とは何かを学び続けながら、その人らしく生きていけるための支援である看護を実践していかなばと決意しました。また、この経験を次世代に引き継いでいこうと思います。



セブ島エバースレイ・チャイルズ療養所資料館前で

## 2015年度WHO笹川健康賞

世界の公衆衛生向上に寄与した個人／団体を顕彰するWHO 笹川健康賞。31回目となる2015年度の実賞者はポーランドの“Childbirth with Dignity Foundation”、5月21日にジュネーブで開催された世界保健総会席上の授賞式で日本財団笹川陽平会長よりトロフィーが贈られました。

Childbirth with Dignity Foundationは、「出産」にまつわる話題がタブー視されてきたポーランドに、大きな変革をもたらした新聞のキャンペーンをきっかけに生まれました。これにより、夫の出産立ち合い、出産後の母子同室や友人や家族との面会が可能になり、孤独に耐えるしかなかった出産と産後が大きく変わりました。

同団体は妊産婦が出産への要望を声にするためのエンパワメントや、出産や母性を大事にし、互いを思いやる開かれた社会作りを目指す活動を続けています。4万ドルの賞金は、“WhereToGive Birth.Info”（どこで産むべきか）という、病院や産科のデータベースを含むウェブサイトの一層の充実に充てられます。

授賞式の壇上にて（於：国連ジュネーブ事務局 パレ・デ・ナシオン）



# ネパール大地震緊急支援(ポートルースチャリティ基金から)

～ハンセン病患者・回復者とその家族たちへの支援～

2015年4月25日にネパール東部でM7.4規模の大地震が起きました。  
この地震による死者は約8,800人、負傷者は2万人以上です。

この地震直後にハンセン病回復者団体であるIDEAネパールは被災地を巡回し、ハンセン病患者・回復者やその家族がこの地震により生活に困難を窮しているという状況を確認しました。彼/彼女らは、もともと差別のために、少人数でかたまって村や町から離れた非常に不便な場所で暮らしているために、地震直後に各地で被災者支援が始められていても支援は届いていなかったのです。よって、IDEAネパールは、彼/彼女らのために当財団へ緊急支援を要請してきました。この要請を受けて、当財団ではポートルースチャリティ基金からの緊急支援

として被害の大きかった震源地周辺5郡(下地図参照)のハンセン病患者・回復者とその家族100世帯に対して1世帯当たり約16,000円の支援金供与を実施しました。IDEAネパールは早速この支援金を届けに各地を回り、支援金を受け取った人々の感謝の気持ちを伝えてきています。支援金供与は、復興期に入るまでの緊急支援で、家屋や家



IDEAネパールを通じて支援金が供与されている様子

財等を失った人たちが当面必要な食糧や飲料水などを買うために使われています。



## 2015年度を迎えて

2015年度が始まりました。

思い返せば、2015年の1月からこれまで、忙しくもやりがいのある期間でした。

1月末、2004年来、日本財団がこれまで海外で主催されてきたグローバルアピールが国内で初実施され、そのサイドイベントを担当(前号および本号2～3ページ参照)、また、在宅看護研修1期生が飛び立ち(前号)ました。その熱も冷めない2月、国立ハンセン病療養所の医療従事者の皆さまとともにフィリピンに参りました(7ページ)。3月には、2002年来の日本財団ホスピスナースネットワークの東京研修と懇親会(前号)、あっという間に、新年度です。公益財団法人化して4年目の当財団が、こうして、ますます忙しくかつ活発でありますのは、私どもの活動を支えてくださる皆様のお蔭です。

引き続き、努力を致しますので、一層のご支援をお願いいたします。



理事長 喜多悦子

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/財団ブログ (ハンセン病対策事業/ホスピス緩和ケア事業/公衆衛生向上のための事業)  
URL: <http://www.smhf.or.jp/> facebook: <https://www.facebook.com/smhf-tokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」: 年4回発行

チームささへるニュース Vol.8 2015年夏発行  
発行元: 公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
発行人: 喜多悦子  
編集: チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局(笹川記念保健協力財団内)  
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階  
電話: 03-6229-5377(代表) FAX: 03-6229-5388  
EMAIL: [smhf@tnfb.jp](mailto:smhf@tnfb.jp) URL: <http://www.smhf.or.jp/>

Supported by  
  
THE NIPPON  
FOUNDATION